

「研修会等名称」

平成 23 年度 教育改革 ICT 戦略大会

場所：アルカディア市ヶ谷

期間：2011 年 9 月 7 日

1. 研修の内容

今回は、いわゆる e ポートフォリオシステムを利用した、教職課程の「履修カルテ」の運営のあり方について情報収集を行うことを目的としており、上記大会のうち、分科会 C 「e ポートフォリオによる振り返り学習の支援」に参加した。

分科会では最初に、慶応義塾大学教職課程センターの竹村英樹氏から、教職課程における活用事例が報告された。同大学では「履修カルテ」導入以前の 2007 年秋からシステムを導入しており、その目的として、履修学生の学習を把握・判断すること、学習プロセスの履歴について自己評価と相互評価を行うこと、そうした記録を学習相談に活かしていくこと、学生によるレポートの相互交流や SNS 活用による授業の活性といったことが挙げられた。システム導入により、それまでも週 1 回、対面で教職課程教員のミーティングを行っていたものの、その時間だけでは相互に共有できなかった情報が蓄積されるようになったこと、学生が他学生の評価を受けることを前提として書くためにレポート等提出物の質が向上したことが主な成果であったという。他方、こうしたシステムにアクセスすることが少ない教員、学生もおり、学生に対しては授業中にそれを促すことができるが、教員間では使用頻度に差があるとの課題も指摘された。

つづいて昭和大学の片岡竜太氏から、「医系総合大学における電子ポートフォリオシステムの構築とその活用」と題して報告が行われた。医学系大学学生の成長は、患者と対面して症状を判断したり、医療技術を施したりするところにも重点があり、学生自身が到達目標を設定し、振り返り、できたこととできなかったことを把握する方法を採っているとのことであった。

最後に、国際基督教大学の日比谷潤子氏から「ICU-folio:導入の背景・現状と今後の展望」について報告があった。同大学では教学改革によって 2008 年度から 1 学科制となっており、入学後のメジャー選択が課題になっているという。そのために、入学直前に ICU でやりたいこと、希望するメジャーについてレポートさせ、1 年次末にその文書を読みなおして新たに「やりたいこと」のレポートを行い、2 年次末にメジャー選択の理由の記入、3 年次末に卒業研究の展望の報告、卒業直前に 4 年間の振り返りを行わせ、そのすべてをポートフォリオとして保存しているとのことであった。

2. 研修の成果

多くの大学において、eポートフォリオシステムを用いた学生の学習履歴の蓄積が行われていることを、まずは知ることができた。ただし、その活用方法はさまざまであり、頻繁に蓄積と振り返りを繰り返す形があれば、1年に一度程度の蓄積を行うという事例もみられた。

教職課程履修カルテをどのように構築するのかは、文部科学省からの指示がない以上、各大学の裁量に委ねられている部分大きい。そうしたなかで、慶応義塾大学が他学生によるレポート評価など、特徴的な実践を行っていることが興味深く思われた。本学教職課程でも、授業中の学生同士の学び合いが教職に対する意識の向上に役立つことを実感する。授業規模が比較的大きいなかで、そうしたシステムの活用が有効ではないかと思われた。また、教職課程が単に法令上のカリキュラムの羅列ではなく、教員養成のためのシステムとして実質的に機能していくためには、教員同士の情報の共有は重要だと考えられる。特に、2013年度から実施される教職実践演習開講の際には、学生の教職に対する適格性を判定せねばならず、そのための情報が可能な限り多く蓄積されていることは望ましいことである。

その一方で、授業のレポート課題をシステムに合わせて出すのでは本末転倒であるし、教職課程科目の内容が「小テスト」のような成績把握に適していない場合も多い。今後、どのような形で履修履歴を蓄積していくのか、教職課程としての利用方針を考慮していく必要がある。また、慶応義塾大学の事例のように、教員によってシステム利用に差が出てもおかしくはない。教職課程は専任教員のみならず多くの非常勤教員の協力をあおいでおり、教員のシステム利用について共通理解を図る必要もあると感じられた。

3. 授業への研修成果の反映状況

現在のところ、eポートフォリオシステムを導入していない段階であり、直接的に授業に対して研修成果を反映させられる状況にはない。今後、システムの活用方針とともに、それを受けた授業のあり方を考えていきたい。

学部長	FD委員長	FD委員会	企画・広報課長	係